令和６年度
小･中学校ＧＩＧＡスクール教科等研究集会

中　学　校
音　楽

徳島県教育委員会

育成を目指す資質・能力

表現及び鑑賞の学習

↓

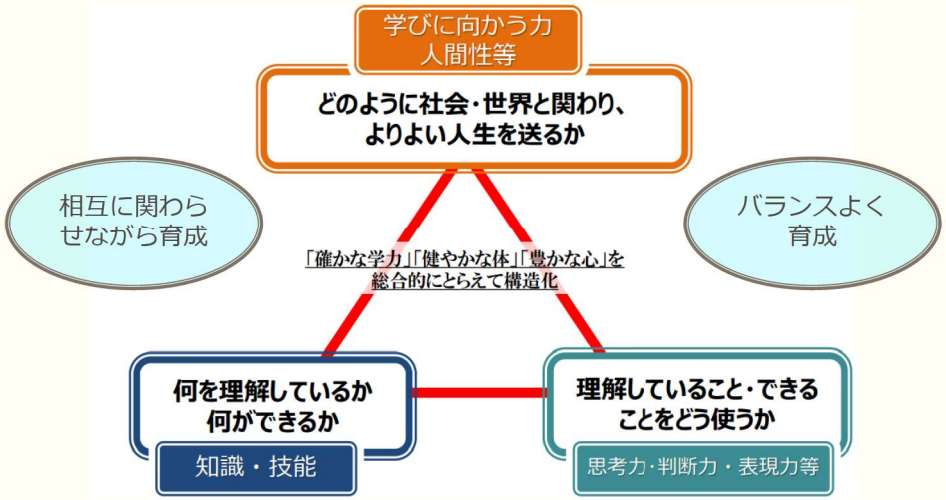
育成を目指す資質・能力

- (1) 知識及び技能
- (2) 思考力、判断力、表現力等
- (3) 学びに向かう力、人間性等

令和６年度小学校及び中学校各教科等教育課程研究協議会（中・音）より作成

育成を目指す資質・能力

育成を目指す資質・能力



「参考資料」より引用

育成を目指す資質・能力

音楽科の目標

解説書p.9

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

↑ (1)~(3)の実現によりこの資質・能力が育成される

(1)曲想と音楽の構造や背景などとの関わり及び音楽の多様性について理解するとともに、創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする。（知識及び技能）
(2)音楽表現を創意工夫することや、音楽のよさや美しさを味わって聴くことができるようにする。（思考力、判断力、表現力等）
(3)音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情を育むとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽に親しんでいく態度を養い、豊かな情操を養う。（学びに向かう力、人間性等）

育成を目指す資質・能力

音楽的な見方・考え方

解説書p.10

音や音楽のよさや美しさなどの質的な世界を価値あるものとして感じ取るときの心の働き

音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、伝統や文化などと関連付けること。

育成を目指す資質・能力

音楽的な見方・考え方

解説書p.10

音や音楽は、そこに鳴り響く音響そのものを対象として、音楽がどのように形づくられているか、また音楽をどのように感じ取るかを明らかにしていく過程を経ることによって捉えることができる

〔共通事項〕を支えとして

音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、伝統や文化などと関連付けること。

育成を目指す資質・能力

音楽的な見方・考え方

解説書p.10

音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、伝統や文化などと関連付けること。

音楽表現を創意工夫したり音楽を解釈し評価したりするなどの学習は一層深まっていく

音楽科・芸術科音楽を学ぶ本質的な意義の中核をなすもの

育成を目指す資質・能力

音楽的な見方・考え方

解説書p.10

音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けること。

解説書p.11

音楽的な見方・考え方を働かせて学習することによって、実感を伴った理解による「知識」の習得、必要性の実感を伴う「技能」の習得、質の高い「思考力、判断力、表現力等」の育成、人生や社会において学びを生かそうとする意識をもった「学びに向かう力、人間性等」の涵養が実現する。このことによって、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力は育成されるのである。

育成を目指す資質・能力

音楽的な見方・考え方

解説書p.11

見方・考え方を働かせた音楽科の学習を積み重ねることによって広がったり深まったりするなどし、その後の人生においても働くものとなる。

今回の改訂は、音楽的な見方・考え方を働かせることにより、音楽科における深い学びの視点から授業改善の一層の工夫がなされることを期待するものである。

音楽的な見方・考え方を育成することが目的ではない。

育成を目指す資質・能力

音楽的な見方・考え方

こうした芸術系教科・科目の「見方・考え方」の特徴は、知性と感性の両方を働かせて対象や事象を捉えることである。知性だけでは捉えられないことを、身体を通して、知性と感性を融合させながら捉えていくことが、他教科等以上に芸術系教科・科目が担っている学びである。また、個別性の重視による多様性の包容、多様な価値を認める柔軟な発想や他者との協働、自己表現とともに自己形成をしていくこと、自分の感情のメタ認知なども含まれており、そこにも、芸術系教科・科目を学ぶ意義や必要性がある。

「中央教育審議会答申（平成28年12月21日）」より引用

育成を目指す資質・能力

音楽的な見方・考え方

また、特に重要な「感性」の働きは、感じるという受動的な面だけではない。感じ取って自己を形成していくこと、新しい意味や価値を創造していくことなども含めて「感性」の働きである。また、「感性」は知性と一体化して創造性の根幹をなすものである。このため、芸術系教科・科目が、子供たちの創造性を育む上でも大切な役割を担っていく。

「中央教育審議会答申（平成28年12月21日）」より引用

育成を目指す資質・能力

解説書p.12

音楽文化と豊かに関わる資質・能力

音楽文化と豊かに関わることができるようになるためには、音楽科の学習において、音楽文化についての理解を深めていくことが大切になる。また、グローバル化が益々進展するこれからの時代を生きる子供たちが、音楽を、人々の営みと共に生まれ、発展し、継承されてきた文化として捉え、我が国の音楽に愛着をもったり、我が国及び世界の様々な音楽文化を尊重したりできるようになることも大切である。

育成を目指す資質・能力

解説書p.12

音楽文化と豊かに関わる資質・能力

これらのことは、自己及び日本人としてのアイデンティティーを確立することや、自分とは異なる文化的・歴史的背景をもつ音楽を大切にし、多様性を理解することにつながる。このような意味において、音楽文化についての理解を深めることは、本来、音楽科の重要なねらいであり、教科として音楽を学習する音楽科の性格を明確にするものである。

育成を目指す資質・能力

解説書p.12

音楽文化と豊かに関わる資質・能力

したがって、曲や曲種について知っている事柄の量を増やすといったことだけでなく、様々な音楽がもつ固有の価値を尊重し、その多様性を理解できるように指導することが求められる。また、音によるコミュニケーションとしての音楽独自の特質を踏まえ、音や音楽によって、人は自己の心情をどのように表現してきたか、人と人がどのように感情を伝え合い、共有し合ってきたかなどについて、生徒が実感できるように指導することも大切である。

育成を目指す資質・能力

解説書p.94

目標と内容における資質・能力の系統立て

(2)第２の各学年の内容の「Ａ表現」の(1)、(2)及び(3)の指導については、ア、イ及びウの各事項を、「Ｂ鑑賞」の(1)の指導については、ア及びイの各事項を適切に関連させて指導すること。

(3)第２の各学年の内容の〔共通事項〕は、表現及び鑑賞の学習において共通に必要となる資質・能力であり、「A表現」及び「B鑑賞」の指導と併せて、十分な指導が行われるよう工夫すること。

育成を目指す資質・能力

目標と内容における資質・能力の系統立て

資質・能力	知識及び技能		思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
	知識	技能		
教科の目標	(1)		(2)	(3)
学年の目標	(1)		(2)	(3)
表現	イ	ウ	ア	＊
鑑賞	イ	－	ア	
〔共通事項〕	イ	－	ア	

育成を目指す資質・能力

目標と内容における資質・能力の系統立て

資質・能力	知識及び技能		思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
	知識	技能		
教科の目標	(1)		(2)	(3)
学年の目標	(1)		(2)	(3)
表現	イ	ウ	ア	＊
鑑賞	イ	－	ア	
〔共通事項〕	イ	－	ア	

育成を目指す資質・能力

解説書p.116

生徒の思考・判断のよりどころとなる音楽を形づくっている要素

○〔共通事項〕に示す「音楽を形づくっている要素」

各学年の〔共通事項〕に示す「音楽を形づくっている要素」については、指導のねらいに応じて、音色、リズム、速度、旋律、テクスチュア、強弱、形式、構成などから、適切に選択したり関連付けたりして理解すること。

育成を目指す資質・能力

生徒の思考・判断のよりどころとなる音楽を形づくっている要素

思考・判断のよりどころ ➡ 焦点化する

- 「工夫の対象」をよりどころとして設定していないか。
- 生徒の実態に合っているか。
- 年間指導計画でのバランスはどうか。
- 資質・能力の育成をベースとして設定できているか。

※要素を多く設定すると
- B規準のハードルが上がる。
- 評価が不明瞭（A規準の生徒の幅）になる。
- 学習の個性化に関わる。

育成を目指す資質・能力

解説書p.7

○「知識」及び「技能」に関する指導内容の明確化

「知識」に関する指導内容について、「曲想と音楽の構造との関わり」を理解することなどの具体的な内容を、歌唱、器楽、創作、鑑賞の領域や分野ごとに事項として示した。

「A表現」の「技能」に関する指導内容について、例えば、歌唱分野における「創意工夫を生かした表現で歌うために必要な発声、言葉の発音、身体の使い方などの技能」を身に付けることなどの具体的な内容を、歌唱、器楽、創作の分野ごとに事項として示した。そのことによって、音楽科における技能は、「思考力、判断力、表現力等」の育成と関わらせて習得できるようにすべき内容であることを明確にした。

育成を目指す資質・能力

解説書p.13-14

○音楽科における「知識」

音楽科における「知識」の習得に関する指導に当たっては、主に次の二点が重要である。一点目は、音楽を形づくっている要素などの働きについて実感を伴いながら理解し、表現や鑑賞などに生かすことができるようにすること、二点目は、音楽に関する歴史や文化的意義を、表現や鑑賞の活動を通して、自己との関わりの中で理解できるようにすることである。

また、「知識」は、学習過程において生徒個々の感じ方や考え方等に応じ、既習の知識と新たに習得した知識とが結び付くことによって再構築されていくものである。

このように習得された「知識」は、その後の学習や生活においても活用できるものとなる。したがって、「知識」の習得は、単に新たな事柄を知ることのみに留まるものではない。

育成を目指す資質・能力

解説書p.13

曲想と音楽の構造や背景などとの関わりを理解するとは、その音楽固有の雰囲気や表情、味わいなどを感じ取りながら、自己のイメージや感情と音楽の構造や背景などとの関わりを捉え、理解することである。したがって、単に教材となる曲の形式などを覚えたり、曲が生まれた背景に関するエピソードなどを知ったりするのみでは、理解したことにはならないことに留意する必要がある。

解説書p.39

曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わりについて理解するためには、〔共通事項〕と関わらせた指導によって、生徒が曲想を感じ取り、感じ取った理由を、音楽の構造や歌詞の内容の視点から自分自身で捉えていく過程が必要である。したがって、教師が感じ取った曲想を伝えたり、その曲の形式や歌詞の意味などを覚えられるようにしたりする、ということに留まるものではないということに十分留意する必要がある。

育成を目指す資質・能力

解説書p.25-26、29

○音楽の構造

音は、一音だけでも音楽と成り得るが、基本的には、音と音との関係の中で意味をもち音楽となる。そして、音楽は、音色、リズム、速度、旋律、テクスチュア、強弱、形式、構成などの要素によって形づくられている。これらの要素は総合的かつ複雑に関わり合いながら音楽として全体像を成している。さらに、リズムの構造、テクスチュアの構造のように、それぞれの要素をより細かく見る場合もあり、構造は様々なレベルや関係性の中で捉えることが可能である。このように音楽を形づくっている要素そのものや要素同士の関連及び音楽全体がどのように成り立っているかなど、音や要素の表れ方の関係性、音楽の構成や展開の有り様などが、音楽の構造である。

育成を目指す資質・能力

参考資料p.44

○　「知識」の評価規準における「音楽の構造」の理解と「思考・判断・表現」の評価規準における音楽を形づくっている要素の知覚とその働きの感受との関係性

例えば、「思考・判断・表現」の評価規準で「音色」を選択して位置付けている題材の場合、生徒が音色を知覚し、その働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて「この曲の前半は弦楽器の音色が中心で落ち着いた感じがするけれど、後半は金管楽器が出てきて華やかな感じになる」などのように考えることと、「音楽の構造」を捉えることとを関連付けて指導することが大切である。

育成を目指す資質・能力

解説書p.14

○音楽科における「技能」

創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能とは、創意工夫の過程でもった音楽表現に対する思いや意図に応じて、その思いや意図を音楽で表現する際に自ら活用できる技能のことである。

音楽科における「技能」の習得に関する指導に当たっては、一定の手順や段階を追って身に付けることができるようにするのみでなく、変化する状況や課題などに応じて主体的に活用できる技能として身に付けることができるようにすることが重要である。

育成を目指す資質・能力

解説書p.26-27

○音楽の表現における技能

生徒が音楽で表現したい思いや意図を声や楽器、楽譜などを使って表現するためには、技能が必要である。発声や発音、楽器の奏法、音楽をつくる技能などを習得し、音楽に対する解釈やイメージ、曲想などを適切に表現することが重要となる。また、身体をコントロールし、姿勢、呼吸法、身体の動きなどを意識することも大切である。

技能は、音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、特質や雰囲気を感受し、それらの関わりについて考え、そこから導き出される表現の創意工夫を通して、その必要性が実感されなければならない。したがって、音楽表現における技能の指導は、こうした一連の活動の中に適切に位置付けられるものである。

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた、３つの視点に立った授業改善

①学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取組、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているかという視点。

②子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考え方を広げ深める「対話的な学び」が実現できているかという視点。

③習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているかという視点。

中学校学習指導要領（平成29年告示）解説　総則編　p.78

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

主体的・対話的で深い学び

・特定の学習方法や指導方法を意味するものではない。
・これまでの実践を否定し、全く異なる指導方法を導入しなければならないと捉える必要はない。

教師一人一人が、子供たちの発達の段階や発達の特性、子供の学習スタイルの多様性や教育的ニーズと教科等の学習内容、単元や題材等の構成や学習の場面等に応じた方法について研究を重ね、ふさわしい方法を選択しながら、工夫して実践できるようにすることが重要。

令和６年度小学校及び中学校各教科等教育課程研究協議会（中・音）より作成

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善についての留意点

各教科等の特質に応じた学習活動の改善

すべての教科等において、これまでの充実が図られてきた学習活動の質を高めていく

単元や題材のまとまりを見通した学びの実現

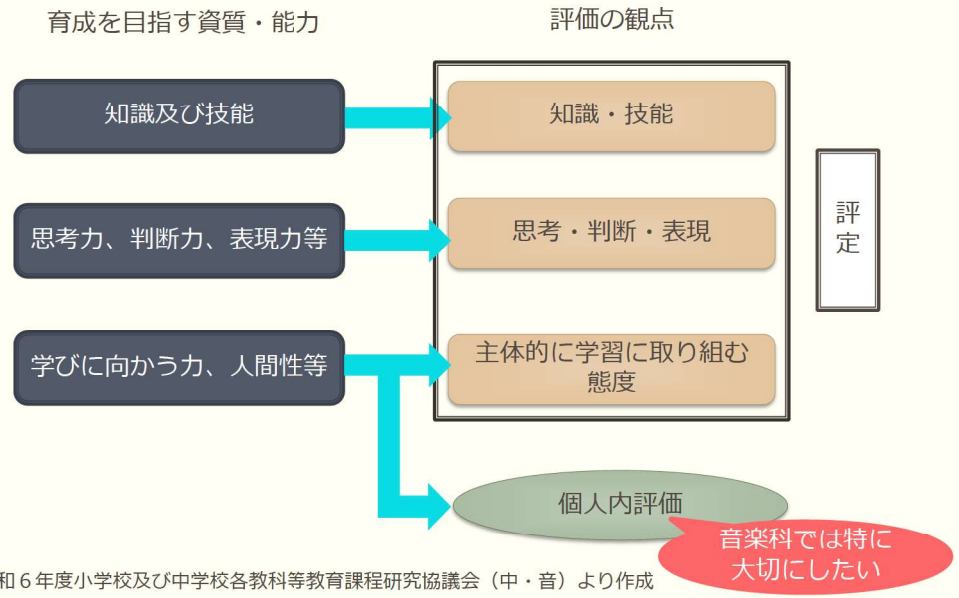
単元や題材などの内容や時間のまとまりをどのように構成するかというデザインを考える

基礎的・基本的な知識・技能の習得

資質・能力を育成するための多様な学習活動を組み合わせて授業を組み立てる

令和６年度小学校及び中学校各教科等教育課程研究協議会（中・音）より作成

指導と評価の一体化



令和６年度小学校及び中学校各教科等教育課程研究協議会（中・音）より作成

指導と評価の一体化

◆　音楽科において育成を目指す資質・能力と評価を一体的に考える。

・音楽科において育成を目指す資質・能力を一体的に考えて題材を構想する。

・学習指導要領の目標や内容、「内容のまとまりごとの評価規準」(「参考資料　第２編　『内容のまとまりごとの評価規準』を作成する際の手順」p.44~を参照）の考え方等を踏まえて学習評価を進める。

指導と評価の一体化

参考資料p.28

【評価の観点及びその趣旨】

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・曲想と音楽の構造や背景などとの関わり及び音楽の多様性について理解している。 ・創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付け、歌唱、器楽、創作で表している。	音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、どのように表すかについて思いや意図をもったり、音楽を評価しながらよさや美しさを味わって聴いたりしている。	音や音楽、音楽文化に親しむことができるよう、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に表現及び鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。

指導と評価の一体化

内容のまとまりごとの評価規準

「内容のまとまり」と〔共通事項〕との関係
・〔共通事項〕アは、思考力、判断力、表現力等に関する内容を示しており、〔共通事項〕アと各領域や分野の事項アは、一体的に捉えるべき内容である。

歌唱	器楽	創作	鑑賞
音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働き（が生み出す特質や雰囲気）を感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え⇒			
⇒歌唱表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、自己のイメージをもって歌唱表現を創意工夫すること。	⇒器楽表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、自己のイメージをもって器楽表現を創意工夫すること。	⇒創作表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、自己のイメージをもって創作表現を創意工夫すること。	⇒鑑賞に関わる知識を得たり生かしたりしながら、次の(ｱ)から(ｳ)までについて考え、音楽のよさや美しさを自ら味わって聴くこと。

令和６年度小学校及び中学校各教科等教育課程研究協議会（中・音）より作成

指導と評価の一体化のポイント

①　評価の場面を精選する

日々の授業の中で生徒の学習状況を適宜把握して指導の改善に生かすことに重点を置くことが重要であり、観点別の学習状況についての評価は、毎回の授業でなく原則として単元や題材など内容や時間のまとまりごとに、それぞれの実現を把握できる段階で行うなど、その場面を精選することが重要である。

②　評価方法を工夫する

各教科等の特質に応じて、多様な評価方法を適切に取り入れて評価を行う。

③　生徒の思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素を明確にする

その題材の学習内容を踏まえて適切に選択し、題材の評価規準の「思考・判断」に位置付ける。

令和６年度小学校及び中学校各教科等教育課程研究協議会（中・音）より作成

指導と評価の一体化のポイント

①　評価の場面を精選する

○「知識」の習得、「技能」の習得、「思考力、判断力、表現力等」の育成の関係性を踏まえて評価場面を適切に設定する。

○以下のような場合には、評価を記録に残す場面を再検討する。
・資質・能力を身に付ける場面と評価を記録に残す場面とが、時間的に大きく隔たっている。
・１つの観点に対して、評価を記録に残す場面が複数回にわたって設定されている。
・各観点の評価の記録に残す場面が、題材の終末に集中して設定されている。

令和６年度小学校及び中学校各教科等教育課程研究協議会（中・音）より作成

指導と評価の一体化のポイント

②　評価方法を工夫する

各教科の特質に応じて、多様な評価方法を適切に入れて評価を行う。

【知識】
生徒が「実感を伴いながら」理解しているか、「自分との関わりの中で」理解しているかを評価する。
→ペーパーテスト等で「知っているか」や「記憶しているか」だけを確認し、その結果だけをもとに評価することは考えにくい。

【技能】
生徒がもった思いや意図を音楽で表現する際に必要となる技能を習得し、それを活用しながら実際に音楽で表現している状況を評価する。
→実技テストや作品等で、生徒の思いや意図とは無関係に、単に「適切に評価できているか」だけを確認し、その結果だけをもとに評価することは考えにくい。

令和６年度小学校及び中学校各教科等教育課程研究協議会（中・音）より作成

指導と評価の一体化のポイント

②　評価方法を工夫する

【思考・判断・表現】

○生徒が「知識や技能を活用して思考・判断し、それを表現する場面を設定し、その状況を評価する。

○〔共通事項〕アに係る、音楽を形づくっている要素の知覚・感受と一体的に捉える。

→「何でもあり」になってしまうことがないよう、知覚・感受したことが思考・判断のよりどころとなっているか、思考・判断の際に既習の知識や技能を活用しているかを見極めながら評価する。

○記述、発表、話合い、プレゼンテーション等の言語活動等を通じて評価する。

→言語によって表現する場面を効果的に設定する。

→記述に多くの時間が費やされないよう、ワークシートの構成や内容を精選する。

令和６年度小学校及び中学校各教科等教育課程研究協議会（中・音）より作成

指導と評価の一体化のポイント

「主体的に学習に取り組む態度」の評価

「主体的に学習に取り組む態度」に係る各教科等の評価の観点の趣旨に照らし、

①　知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面と、

②　①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面という二つの側面を評価することが求められる。

自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら学ぼうとしているかどうかという意思的な側面を評価

各教科等の特質に応じて、生徒の発達の段階や一人一人の個性を十分に考慮しながら、「知識・技能」や「思考・判断・表現」の観点の状況を踏まえた上で、評価を行う必要がある。

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会
「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」

指導と評価の一体化のポイント

「主体的に学習に取り組む態度」の評価

「粘り強い取組を行おうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」の把握

- 　他の観点が十分満足できるものであれば、基本的には、学習の調整も適切に行われていると考えられる。
- 「努力を要する」状況（C）と判断されそうな児童について、主に観察によって、どちらに課題があるかを把握し、指導の改善に生かす。

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会
「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」

指導と評価の一体化のポイント

「主体的に学習に取り組む態度」の具体的な評価の方法としては、ノートやレポートなどにおける記述、授業中の発言、教師による行動観察や、児童生徒による自己評価や相互評価等の状況を教師が評価を行う際に考慮する材料の一つとして用いることなどが考えられる。その際、各教科等の特質に応じて、児童生徒の発達の段階や一人一人の個性を十分に考慮しながら、「知識・技能」や「思考・判断・表現」の観点の状況を踏まえた上で、評価を行う必要がある。したがって、例えば、ノートにおける特定の記述などを取り出して、他の観点から切り離して「主体的に学習に取り組む態度」として評価することは適切ではないことに留意する必要がある。

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会
「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」

指導と評価の一体化のポイント

「主体的に学習に取り組む態度」の評価

それぞれの観点別学習状況の評価を行っていく上では、児童生徒の学習状況を適切に評価することができるよう授業デザインを考えていくことは不可欠である。特に、「主体的に学習に取り組む態度」の評価に当たっては、児童生徒が自らの理解の状況を振り返ることができるような発問の工夫をしたり、自らの考えを記述したり話し合ったりする場面、他者との協働を通じて自らの考えを相対比する場面を単元や題材などの内容のまとまりの中で設けたりするなど、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を図る中で、適切に評価できるようにしていくことが重要である。

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会
「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」

指導と評価の一体化のポイント

「主体的に学習に取り組む態度」の評価に向けた工夫

1　生徒が主体的に学習に取り組みたくなる題材を構想する

・生徒がその題材を学習することの必然性・必要性を感じながら学習に取り組んでいるか。
・目標、めあて、問いが生徒にとって「自分ごと」として捉えられているか。

・生徒が興味や関心をもっていることや、これまでの学習状況を踏まえて教材等を選ぶ
・他の教科等の学習と関連させた生活や社会とつなげる課題を設定する
・地域の人材や教育資源を生かしたりする　など

令和６年度小学校及び中学校各教科等教育課程研究協議会（中・音）より作成

指導と評価の一体化のポイント

「主体的に学習に取り組む態度」の評価に向けた工夫

2　生徒が自らの学習状況を評価できる場面を設定する

・協働的な学びの場面を適切に設定しているか。
・生徒の「学習の振り返り」が次の学びにつながっているか。
・生徒が「分かった」「できた」「身に付いた」と実感する瞬間があるか。
・生徒が学習の「ゴール」を意識できているか。

・学習の振り返りの場面の効果的な設定
・「振り返りシート」が生徒の主体的に学習に取り組む態度の育成に生かされているか（単なる評価のための資料になっていないか）

令和６年度小学校及び中学校各教科等教育課程研究協議会（中・音）より作成

音楽科におけるＩＣＴの活用

解説書p.102

指導計画の作成と内容の取扱い

2　内容の取扱いと指導上の配慮事項
(1) 各学年の「Ａ表現」及び「Ｂ鑑賞」の指導に当たっては、次のとおり取り扱うこと。

エ　生徒が様々な感覚を関連付けて音楽への理解を深めたり、主体的に学習に取り組んだりすることができるようにするため、コンピュータや教育機器を効果的に活用できるように指導を工夫すること

音楽科におけるＩＣＴの活用

音楽科におけるICT活用の例

【表現】

- 自分の歌唱や演奏を録音・録画し、それを再生しながら、表したい音楽表現の見通しをもったり、技能の習得過程を確認したりする。
- 音を可視化するソフトを利用して、音高や音量、アーティキュレーションなどを確認し、表したい音楽表現を創意工夫するための修正の方向性をもつ。
- インターネットを活用して、曲の背景などについての知識を得ながら、歌唱・器楽で表現するための表現意図を深める。
- 音楽制作ソフトなどを活用して、音の連ね方や重ね方を即興的に試しながら音楽をつくったり、音色を様々に変化させながら、表したい音楽のイメージを豊かにしたりする。
- つくった音楽を再生して音で確認しながら、創作表現を工夫したり、ペアやグループで感想やアドバイスを伝え合いながら、つくった作品を修正したり、さらに工夫を重ねたりする。

「ＧＩＧＡスクール構想のもとでの中学校音楽科、高等学校芸術科音楽の指導について」より引用

音楽科におけるＩＣＴの活用

音楽科におけるICT活用の例

【鑑賞】

- クラウドに保存された演奏の音源や画像を、自分が視聴したい部分を取り出して繰り返し聴きながら、音楽を形づくっている要素やその働きの感受を深める。
- 作品の背景となる文化・歴史、他の芸術との関わりについて考える際に必要な情報をインターネットで検索し、作品に対する理解を深める。
- 同じ作品を異なる楽器や異なる演奏家による演奏で聴き比べ、音楽表現の共通性や固有性について考えながら、よさや美しさを味わって聴く活動につなげる。

「ＧＩＧＡスクール構想のもとでの中学校音楽科、高等学校芸術科音楽の指導について」より引用

音楽科におけるＩＣＴの活用

活用例１	自分の歌唱や演奏を音や動画で記録する。
活用例２	範唱・師範の音源・動画を見ながら歌ったり楽器演奏したりする。
活用例３	歌詞や楽譜等をスクリーンに投影する。
活用例４	声や楽器の音を可視化する。
活用例５	意見やアイデア等を集めたり交流させたりする。
活用例６	ワークシートや学習資料を電子データで配付、共有、回収、返却する。
活用例７	端末やクラウドに保存された音楽をイヤホンで聴く。
活用例８	楽譜ソフトや作曲アプリ等で音楽をつくる。
活用例９	外国語学習用アプリ等で外国語の歌詞の発音を音声で確認する。
活用例10	テキストマイニングを用いて児童生徒の意見や着目点などの傾向を分析的に表示する。
活用例11	モーションキャプチャー等で身体の使い方を分析する。
活用例12	動画配信サイトで、他の楽曲や他の演奏家による演奏を視聴する。
活用例13	教室外の人や施設と連携しながら、表現したり鑑賞したりする。
活用例14	ウェブサイト等から曲や曲の背景に関する情報を収集する。

令和６年度小学校及び中学校各教科等教育課程研究協議会（中・音）より作成

音楽科におけるＩＣＴの活用

解説書p.114

作品を記録する方法の工夫

指導計画の作成と内容の取扱い

２　内容の取扱いと指導上の配慮事項

(7)　各学年の「Ａ表現」の(3)の創作の指導に当たっては、即興的に音を出しながら音のつながり方を試すなど、音を音楽へと構成していく体験を重視すること。その際、理論に偏らないようにするとともに、必要に応じて作品を記録する方法を工夫させること。

音楽科におけるＩＣＴの活用

作品を記録する方法の工夫

単に「何によって（楽譜、録音や録画で、アプリで）記録するか」を選択することに限らない。

次時に自分がつくった音楽を再現して、創意工夫の見通しをもったり、工夫した点や課題に感じている点などについて他者に説明したりする際に、どのような情報をどのような方法で記録しておくのが最もよいかを考える。

複数の方法で記録

創意工夫の過程などを図や言葉で記録

令和６年度小学校及び中学校各教科等教育課程研究協議会（中・音）より作成

音楽科におけるＩＣＴの活用

解説書p.114

自己や他者の作品を尊重する心情や態度の育成

指導計画の作成と内容の取扱い

２　内容の取扱いと指導上の配慮事項

(1)　各学年の「Ａ表現」及び「Ｂ鑑賞」の指導に当たっては、次のとおり取り扱うこと。

カ　自己や他者の著作物及びそれらの著作権の創造性を尊重する態度の形成を図るとともに、必要に応じて、音楽に関する知的財産について触れるようにすること。また、こうした態度の形成が、音楽文化の継承、発展、創造を支えていることへの理解につながるよう配慮すること。

音楽科におけるＩＣＴの活用

ＩＣＴは生徒にとって学びが深まるアイテムになっているか？

●教師にとって「創作の授業がしやすくなった」
- 「創作」は成立するが、「学習」は成立しているか。
- 生徒にとって学びやすいか－「学習の個性化」の視点

●ＩＣＴを学習活動のどこに位置付けるか
- 教師／ＩＣＴ／生徒
  （ＩＣＴが教師と生徒の間に立ちはだかっている）
- ＩＣＴによって学習活動が複雑になっていないか

令和６年度小学校及び中学校各教科等教育課程研究協議会（中・音）より作成